

2020 年度 事業計画書

公益社団法人 やどかりの里

2020年度やどかりの里活動方針

やどかりの里 50周年の節目にあたって 歴史を学び 未来に生かす 地域の中で支え・支え合う活動を

I 私たちを取り巻く情勢

2020年度は、新型コロナウイルス感染問題の影響を大きく受けスタートする。感染の危険性をできる限り回避する対策をとりつつ、日常の活動を継続していく。

災害や今回のような感染症の広がり直面した時、障害者総合支援法の日額払いの報酬制度の問題が明らかになる。日額払いの報酬制度の下では、障害のある人の健康を守る対応が、事業所運営の危機に直結する。国は日額払いの報酬制度導入にあたって、障害のある人の選択の権利、競争原理の導入の必要性を上げた。実際には、障害福祉の世界を市場化し、職員の非常勤化、事業所の不安定経営を招くことになった。日額払いの報酬制度の見直しは必須である。新型コロナウイルス感染問題によるイベントや事業の自粛は、働く場での仕事にも影響が大きい。

また、障害分野で見過ごせないのは、津久井やまゆり園の障害者殺傷事件のその後であろう。横浜地裁での裁判が結審し、死刑判決が出された。しかし、なぜ被告が必要ないのちと不要ないのちを選別する思想をもつことになったのか、解明されていない。この事件を特別な事件と片付けるわけにはいかない。いのちを選別する思想は被告に限ったものではないからだ。

3月初旬に報道された神戸市の精神科病院、神出病院での虐待・暴力事件で看護師等6人が逮捕された。鍵のかかった病棟の中で逃げることもかなわず、残虐な虐待・暴力を受け続けていた。ここにも精神科病院の抱える根本課題が露呈した。長年にわたる閉鎖的処遇によって、治療の場であるはずの医療機関で

の権利擁護の仕組みがまったく機能していない。こうした人間の尊厳を傷つける医療機関が存在し続けられる日本の精神科医療のあり方を根本的に見直す必要がある。

こうした社会の状況と向き合いながら、2020年度のやどかりの里の活動が始まる。

II やどかりの里の活動方針

50周年にあたり、やどかりの里を支えていただいた多くの人たちや関係機関の皆様に感謝の意を表す記念式典、祝賀会、やどかりの里が手にしてきたさまざまな知恵や意見を発信する記念出版などが予定されている。

ここ10年を考えると、やどかりの里は障害者自立支援法（現在の障害者総合支援法）への対応に追われていた。この法律は、障害者福祉のあり方を大きく変えるものだったが、その仕組みを利用しつつもやどかりの里の活動を変質させない努力をこの10年続けてきた。そして、2018年に10年ぶりにやどかりの里人づくりセミナー（第10回）を開催したことで、見通しを得た。このセミナーでの学びや気づきを生かし、2019年度にはつなぐ・つくるプロジェクトが始動し、2020年度本格稼働の1年となる。

1) 歴史を学びこれからを考える（学習の課題）

昨年に引き続き、さまざまな機会にやどかりの里の50年の活動を学び合う。活動の蓄積を生かしながら、メンバーや家族のニーズやまだやどかりの里につながっていない人たちのニーズ、活動する地域のことを学びつつ、新たな活動づくりにつなげていく。

2) 本来あるべき精神科医療を求めて（精神医療の課題）

厚生労働省は、精神障害にも対応した地域包括ケアシステムをテーマにした検討会を進めている。しかし、社会的入院問題、精神科特例や精神科救急や急性期病棟での隔離・身体拘束問題を棚上げした地域包括ケアシステムの実現は困難だ。ベルギーの精神医療改革から学びつつ、関係団体と協力し、精神医療改革への道筋を考えていく。

一方、サポートステーションやどかりに訪問の機能を加え、精神科病院や関係機関との連携を進め、地域で支援につながりにくい人たちへの訪問活動に取り組む。

3) ピアサポーターの活躍（働くことの課題）

やどかりの里の各所でピアサポーターが活動できる環境整備を行う。同時にその養成や定着に向けての取り組みをメンバーと職員の間共同作業で進めていく。

4) 新たな資金づくりの模索（財政基盤の拡充の課題）

財政基盤の拡充にあたっては、やどかりの里の活動を広く社会にわかりやすく伝えていく必要がある。まずはホームページのリフォームを行う。同時にファンドレイジングを学びつつ、試行的にクラウドファンディングなど新たな取り組みに挑戦する。

5) 2つのつなぐ・つくるプロジェクト（普遍化の課題）

やどかりの里は、競争社会ではない、共に生きる社会を目指してきた。つなぐ・つくるプロジェクト（1）は、地域の人々や関係機関を共感を土台にしたつながりを強め、見沼の自然や人々の営みを土台にした場づくりを進める。

今年度は、つなぐ・つくるプロジェクト（2）として、地域で孤立している人たちが、孤立から抜け出すために必要なつながりづくりを多様な関係機関と連携して進める。

Ⅲ 各所事業計画

1. 事務局

1) 総務

世代交代と今後の活動展開を見据え、昨年度より事務局体制の見直しと課題整理を行ってきた。次世代の担い手の育成に着手しつつ、事務局体制の再編を年度後半に取り組む。

今年度は役員改選の年度に当たるため、退任・新任に伴う所管への報告、登記など必要な諸手続を行っていく。

職員の処遇に関しては、社会保険労務士と密に連携し、「働き方」に関連する法令の改定に合わせ必要な諸規則の変更を行っていく。

2) 財務

昨年10月実施された消費税増税により複雑になった会計仕分けでは、今年度も顧問税理士と連携をはかり細部に注意しつつ処理を行っていく。2020年度の収支予算規模は約5億5,340万円、昨年比約1,340万円増となっている。

法人運営の収入は障害者総合支援法に基づく個別給付費と地域活動支援センターの運営費及び障害者生活支援センターの委託費である。個別給付費は日払い制度のため、利用状況により収入額は大きな影響を受ける。また本年度はさいたま市がプロポーザル方式を導入し、障害者生活支援センターへの委託を決定する。やどかりの里の3支援センターの後半期の委託は現段階では決定していない。収支相償の枠の中で対処していくことになる。

一方公的資金以外の資金調達については、つなぐ・つくるプロジェクトの中に編成されたチームと連携しつつ進める。

2. 相談支援活動

1) 在宅中心の生活をしている人の実態を明らかにし、新たな取り組みを検討する

生活支援センターの相談者の約7割は、社会的な支援につながらず、在宅生活を送っている。そのため、在宅中心の生活を送ってい

る人たちの実態を明らかにし、課題を整理する。その上で、やどかりの里として新たに取り組めることを検討する。

また、昨年度から始まった「さいたま市精神障害者訪問支援モデル事業」にも継続的に参加し、訪問支援の仕組みづくりについて関係者とともに協議を進める。

2) 各区の相談支援態勢づくりを進める

昨年度より岩槻区において地域部会のモデル事業が始まり、今年度は新たに2区を加えて本格実施される。地域部会は区の自立支援協議会の役割が必要となるため、各区の障害のある人の実態や地域課題を明らかにし、事業所間のネットワークづくりに取り組むことになる。区の地域性を活かし、学習会の開催など各区で取り組めることを支援課や関係機関と連携して進めていく。

3) 相談支援事業が後退しないよう、市内の関係機関とともに市との協議を重ねる

今年度後期から、さいたま市の相談支援事業にプロポーザル方式が導入される。専門性が求められる相談支援事業に評価指標が不明確なプロポーザル方式の導入は、相談支援の実績をどう評価するのか不透明でもあり、相談支援のあり方を変えていくことが危惧される。市内の生活支援センターとも協議しながら相談支援の質の後退が起こらないよう、さいたま市との協議を重ねていく。

3. 生活支援活動

50周年を迎え、あらためてやどかりの里の活動理念の原点にある「仲間づくり」「安心の保障」を意識した活動を進めていく。また、長年課題となってきた高齢化への対応、親亡き後の暮らし、家族支援、社会的入院の問題などに対応するために、生活支援会議の中でワーキングチームをつくり、今年度は以下の3点に重点を置いて取り組む。

1) 訪問支援チームに試行的に取り組む

登録者の中にも電話相談のみで、なかなか活動に参加できず在宅中心の生活になって

いる人が少なくない。また、家族会からも訪問支援へのニーズや期待が大きく、検討してきた。そこで今年度は、サポートステーションの訪問型生活訓練を開始し、健康増進プロジェクトチームとも連携し、多職種による訪問支援チームづくりを試行的に開始する。また、チームづくりにあたってはピアサポーターの活用も検討する。

2) 社会的入院の解消に向けて取り組む

さいたま市精神障害者地域移行・地域定着支援連絡会に参加し、市内の全精神科病院に訪問調査を行い、退院支援対象者への具体的な支援を進めていく。

また、今年度も引き続きさいたま市のピアサポーター養成事業の委託を受け、対象者の有無に関わらず、全精神科病院にピアサポーターが派遣できるよう、関係機関との協議を進め、病院での交流会や研修などを共同企画し、開催する。

3) 仲間づくりのグループ活動に取り組む

生活支援会議で登録者の状況を定期的に共有し、在宅中心の生活になっている人の生活状況やニーズを整理し、活動に参加するためのきっかけづくりの1つとして「仲間づくりのグループ活動」に取り組む。

そのために、やどかりの里のグループ活動の歴史を学習する機会をつくり、ピアサポーターの協力も得ながらグループ運営を行う。上半期は準備期間とし、下半期より定期的に開催できるよう進める。

4) 各活動

(1) サポートステーションやどかり

今年度も、生活訓練・生活介護・宿泊型自立訓練・短期入所の4つの多機能事業に取り組む。特に、生活訓練事業については、通所型・宿泊型に加え、訪問型の支援に新たに取り組む。生活介護事業については、定員増員を検討していく。

① 生活訓練（自立訓練）事業

定員 14人 現員 24人

在宅中心の生活から一歩外に出る習慣を身

につけるために利用する人、就労継続支援事業の利用に向けて生活リズムをつくるために利用する人など、1人1人の個別支援計画に合わせた支援を行う。

これまで通所型の生活訓練を行ってきたが、今年度は訪問型の生活訓練にも取り組み、外出できるようになるまでの支援や、対人関係のスキルを身につける支援など、新たなニーズに対応するための取り組みを進める。また、ピアサポーターの活用も視野に入れ、長年の懸案である訪問支援チームづくりにつなげる取り組みとしていく。

② 宿泊型自立訓練事業

定員 16 人 現員 15 人

2年間の訓練期間の中で、地域生活に移行していくための支援を行う。精神科病院に入院中の人たちの体験利用を積極的に受け入れ、関係機関とのケア会議を開催しながら、退院に向けた支援を行う。また、さいたま市ピアサポーター養成事業の委託を受け、精神科病院への訪問や面会、外出同行支援などピアサポーターが活躍する機会をつくり、1人でも多くの方が精神科病院から退院できるよう支援を行う。

③ 生活介護事業

定員 10 人 現員 23 人

利用希望は年々増加しており、定員増について検討を進めてきた。今年度は定員を10人とし、ニーズに対応できるようにする。

さらに、健康づくりのプログラムの強化、保健師・看護師を増員して健康チェックの習慣、健康指導を行う。また、書道・絵画などの創作活動にも力を入れ、展示発表の機会を増やす。

④ 短期入所事業

定員 3 人。さいたま市内の障害者生活支援センター、関係機関等と連携しながら、緊急的なニーズにも対応できるよう体制を整える。また、利用案内を見直し、関係機関に周知できるように努める。

設備のリフォームを行い、利用しやすい環境整備を行う。

(2) グループホーム

定員 63 人 現員 53 人

年齢を重ねても安心してグループホームで暮らし続けられるように、今年度は以下の3点について重点的に取り組む。

① 健康を守って暮らせる住環境の整備

メンバーの高齢化（平均年齢 58.9 歳 / 2020 年 3 月末現在）に加え、大規模な自然災害や感染症など、メンバーの生活や健康に大きな影響を与える事象も多い。メンバーが健康を守り、安心して暮らせるよう、個々に応じた支援の見直しを行い、住環境の整備やリスクへの対策等を進めていく。

② メンバー同士の支え合いの環境づくり

グループホームで暮らす身近なメンバー同士で相談したり交流することは、日常生活を送る上での安心や安定につながっている。災害時にも日常的なつながりが大きな支えになる。今年度は、エリアごとにミーティングを行うなど集まる機会を創り、仲間同士で支え合える環境づくりを進める。

③ ピアサポーターとの協働のチームづくり

グループホームで働くピアサポーターは 4 人（2020 年 3 月末現在）。ピアサポーターならではの力を活かし、メンバーの日常生活の支援に加えて、仲間づくりの取り組みや行事等の企画運営など、協働して取り組めるチームづくりを進める。

(3) 大宮東部活動支援センター

登録者は 71 人。半数は 1 人暮らし、平均年齢は 54 歳である。登録者の日常生活支援、いつでも安心して過ごせる憩いの場づくり、ニーズに合わせた活動づくりを行う。

活動に参加する機会が少なく、自宅中心の暮らしを送っている人たちへの訪問支援を拡充し、暮らしの実態把握とニーズを探っていく。また、関係機関とも連携しながら、地域で安心して暮らし続けていくために不足している地域資源を明らかにし、今後の地域活動支援センターのあり方を検討する。そのほか、定例ミーティングの開催、健康づくりの取り組みなども行う。

(4) 大宮中部活動支援センター

登録者 36 人。平均年齢は 56.9 歳で、1 人暮らしをしている高齢の人たちが多い。登録

者の日常生活支援，落ち着いて過ごせる憩いの場の提供を行う。

上半期は，登録者のニーズ把握を進め，特に，憩いの場に来ることが難しく，自宅中心の暮らしになっている人たちの生活状況を改めて確認していく。下半期は，1人1人のニーズを整理し，必要な支援や活動づくりにつなげていく。そのために，関係機関と連携し，必要に応じて訪問による支援を行っていく。憩いの場の空間を活かした仲間づくりの機会や季節のイベントなどをより充実させる。また，法人内の事業所とも連携して，地域とのつながりづくりを意識した活動も行う。

(5) 浦和活動支援センター

登録者は55人，家族と同居している人は約半数，平均年齢は50歳。登録者への日常生活支援，日中の居場所や仲間づくりの場として機能する憩いの場の提供，登録者及び地域に住む障害のある人や家族のニーズに基づいた活動づくりを行う。特に家族以外の人との関わりの機会を増やすため，少人数での活動を意識して取り組む。また，昨年度に引き続き浦和地域で必要とされている活動を模索し，他の機関とも意見交換を行う。

4. 労働支援活動

2019年10月からの消費税10%への引き上げに伴い，2019年度の障害福祉サービス報酬改定で基本報酬に若干の上乗せがあったものの，生産に係る材料や消耗品などの値上げ，また，食品販売に関する消費税率の違いなどの対応が余儀なくされた。2020年2月頃から新型コロナウイルス感染症対策により，イベント中止などによる受注や販売減，マスクなどの衛生品不足，働く人の感染症予防対策など影響が続いている。

B型事業所の基本報酬の基準は平均工賃による7段階であり，精神障害のある人への障害特性が配慮されていない。2021年度の報酬改定では，食事提供体制加算などの廃止も懸念され，事業運営はますます厳しくなることが見込まれる。こうした状況の中で，働く場を利用している人たちのニーズや，地域に潜

在している課題を重ね，当面の課題に対応しつつ，「つなぐ・つくるプロジェクト」と連動し事業展開を検討する。

また，就労した人を対象としたOB会を引き続き行う。

1) 地域と「つなぐ・つくる」事業の検討

昨年度より，旧小規模作業所に由来するすてあーず，あゆみ舎，ルポーズの3か所で事業展開について検討を進めているが，昨年度各事業所の現状と課題の整理を行った。その中で，「メンバー層の幅広さとそれぞれに合った仕事づくり」「工賃向上だけを目標とせず，その人の状態に応じた働き方のあり方」「地域との関係づくり」「共同事業推進・パートナーシップ」といった4つの課題が浮かび上がった。この共通課題を3事業所だけの問題とせず，また，「つなぐ・つくるプロジェクト」と連動させ，やどかりの里5か所の働く場の課題として検討していく。

イベント参加やピアショップ販売など，一事業所で担いきれない販売活動にも作業分担などで補い合い，販路開拓や仕事づくりにつなげてきた。イベント等の共同出店を通して，メンバー同士の交流を深める。

2) 安心して働き続けるための環境整備

やどかりの里の就労継続支援B型事業の利用者は204人（2020年1月現在）。その中で30歳以下は23%，40歳代が39%，50歳以上は38%である。年齢を重ね，身体的機能の低下などがみられるメンバーの働くことをどう支えていくかが課題である。また，やどかりの里で働き始めても継続していない人，働きたい気持ちがあっても通所が難しい人などに，送迎や他事業の活用も含め，働く場に期待されていることを整理し，環境整備を行う。

4) 各活動

(1) エンジュ

- ・事業：就労継続B型支援，就労定着支援
- ・定員：B型33人
- ・現員：B型66人，就労定着1人

① 事業について

・食事宅配事業

昼食についてはここ数年営業活動に取り組めておらず、利用者減の傾向である。地域包括支援センターや近隣などへ営業を再開する。

・菓子製造販売

定期的に受注が入り、「菓子作りに携わりたい」「技術をあげたい」というメンバーもおり、下半期より定期的に製造できる態勢を整える。

・軽作業

厨房での仕事が不得手だったり、一時的に腰痛などがあるメンバーが主として取り組んでいる。ミスなく納品できるよう引き続き取り組む。

② 労働を支える

月1度の全体ミーティングの他、業務ミーティング、他、学習会などを行う。

ダイエットプログラムの継続に加え、月1回程度の運動プログラムを行う。

③ 地域への発信

近隣に「よみさんぽ」や「エンジュ通信」を定期的に配布する。「配食ネットワーク見沼」など見守りのネットワークに参加する。

④ 家族との連携

活動の情報共有や家族間の交流を図るため、通信のお届けや懇談を行う。

(2) あゆみ舎

・事業：就労継続支援B型

・定員：20人 現員：47人

① 事業について

作業内容としては、採尿キット作成、団体機関誌等の封入封緘、DM便配達、ノートPC解体・使用済みPC回収、野菜販売、駐車場清掃などがある。

これまで業務の中心であった採尿キット製作の作業量が減ったことから、PC解体業務を中心にピアサポーターとメンバーの力が発揮できる作業内容への立て直しを図る。法人内連携による仕事起こしに積極的に取り組み、リサイクル・リユースの視点で仕事起こしを進める。

地域とのつながりの構築に向けて、あゆみ

舎近辺の清掃業務や季節の地域イベントへの参加を積極的に行う。

② 労働を支える

1人1人が得意なことを活かし、自分に合った働き方ができるよう、話し合いを基盤とした運営と作業の選択肢を増やす。

業務やイベントを通してメンバー同士のつながりづくりに取り組む。読書や絵を書くことなど文化活動に関心のあるメンバーも多く、生活を充実させるためにあゆみ舎での取り組みを検討、実施する。

人生の節目を感じられる機会として、誕生日や長寿のお祝いを継続する。季節のお祝いごとについても年間の行事としてできることから取り組む。

防災意識を高める取り組みや、健康づくりを意識した学習会、ピアサポーターやメンバーの仕事でもあるランチづくり、スポーツレクレーションなどを開催する。参加者増を目指し、開催の工夫をする。

(3) すてあーず

・事業：就労継続支援B型

・定員：20人 現員：35人

① 事業について

リサイクルショップを運営する店舗部門では、引き続き地域の中の「もったいない」思いをつなぐことを意識した店舗運営を行っていく。

布・革製品の製作部門では、製作手順の整理やマニュアル化に取り組み、製作工程の平準化を図る。また、技術アップと新製品開発に取り組む。

② 労働を支える

就労の目標や働き方の多様さに対応できるよう、作業の拡充に取り組む。また、法人内事業所と連携し、イベント等に参加することを通して、地域との交流を深める。また、埼玉県障害者アートネットワーク（TAMAP 0）に参加し、アートの領域での活動展開について情報交換を行う。

(4) ルポーズ

・事業：就労継続支援B型

・定員：20人 現員：37人

① 事業について

作業内容としては、喫茶店運営、外部販売、ギャラリー運営、菓子製造販売、農作物販売などを行っている。

喫茶店運営を柱に据え、来店客数や外部販売先の増加をはかり、収益の維持向上、仕事量の拡大も目標とする。これまで取り組んできた「地域の中の憩える場」として、ギャラリースペースの充実や、菓子製造部門の注文販売にも対応していく。夏秋期における梨の販売も継続して取り組み、収益の向上をめざす。

事業運営委員会も継続的に組織し、話し合いの場、考え合う場を大切にする。業務内容の充実や発展とともに、環境整備に配慮していく。

② 労働を支える

食品衛生に関する知識向上や、他事業所の運営、飲食店経営に関する研修等を行い、業務全般に対する質の向上を目指していく。

「接客・調理技術の向上」や「次のステップアップのために」等の個々の目標を大切に、その実現に向けて取り組めるように、また新規利用希望者の受け入れも積極的に行っていく。

これからの活動づくりについては、やどかりの里の働く場全体を意識しつつ、ルポーズの特色や特徴をふまえ、中長期的な視点でメンバー・職員で検討、決定していく。

(5) やどかり情報館

・事業：就労移行支援、就労継続支援 A 型、B 型

・定員 就労移行 8人 就労継続支援 A 型 15人 B 型 15人

・現員 就労移行 1人 就労継続支援 A 型 22人 B 型 17人

① 事業について

やどかり出版：年度前半は委託での出版計画が重なっており、年度後半は JD 事典ややどかりの里 50 周年記念出版などが事業の中心となる。継続的に営業活動を行う。

やどかり印刷：法人内外の印刷を受注しながら、印刷機材のメンテナンス、技術力アップに努める。今後の事業展開について検討を進める。

やどかり研究所：月 1 回程度の運営委員会を中心に活動し、ピアヘルパーの養成や定着の研究、やどかりの里 50 周年を記念した学習会等の企画運営案を担う。会員制のやどかり研究所のあり方について検討していく。

やどかり農園：「エシカルな世界をめざして、私たちができること」をテーマに農と食を基軸とした多様な地域との連携を図る。無肥料自然栽培の実践、無添加乾燥野菜の製造販売、カカオ豆・カシューナッツのフェアトレード商品の開発、ライ麦ストローの製造販売を柱に働く場づくりを進める。収穫祭や味噌づくり、調味料づくり教室を開催し、農の特性を生かした地域交流拠点づくりを行う。地域の起業家と連携し、自然保全に関連するビジネスで、収益を生み出す仕組みをつくる。協働ネットワーク事業：「協働ネットさいたま」の構成メンバーとして、地域のネットワークを活かした協働の仕事づくりを行う。思い出の里植栽管理業務請負、青山苑ゴミ収集業務請負、埼玉スタジアム、リンガーハットの除草作業請負、苗木の挿し木作業請負、催事ポップコーン実演販売、地域交流イベントへの参加、近隣施設との交流会の開催、他業種交流、住民との交流の場に積極的に参加する。

ピアサポート事業部：隔月にピアサポーターの研修会を開催し、ピアサポーター同士の経験の共有を通して、研鑽を重ねる。

やどかり塾：入職 3 年目までの職員の研修と中堅職員の研修を実施する

② 労働を支える

やどかり出版は、外注の仕事の増加に伴い、働くメンバーの募集を行うが、ハローワークなどでの求人を検討する。また、ピアサポート事業部では現在進めている「ピアサポーターの養成と定着」の研究チームと協力しながら、ピアサポート養成講座を開催し、ピアサポーターの養成と働く場の拡充に取り組む。やどかり農園でも多様な仕事づくりを進め、働く人を広く募集していく。

5. セルフヘルプ活動

1) メンバー交流会議

各事業所から代表者を募り、メンバー交流会議を定期的に行う。「メンバーの横のつながり」「いろいろな人たちとの出会い」やどかりの里の将来像を考え合う」「メンバーの力を反映させる仕組みづくり」をコンセプトに、メンバー交流会を年2回開催する。今年度は「B.B.Q 大会（第16回）」、「新たな試みとして「やどかりの里合同旅行（仮称、第17回）」の企画運営を行う予定。

2) 浜砂会

(1) 定例会（毎月第2木曜日）、はまサロン（第3木曜日）を開催、近況を報告したり、外部講師を招いての勉強会も行う。旅行会や食事会などを通じおやじの会と交流を図る。やどかりの里の行事や活動、きょうされんの署名活動等にも協力していく。

(2) さいたま市精神障害者家族会連絡会や県精神障害者連合会と共に活動を行い、市と県から委託された電話相談にも参加する。「家族による家族学習会」開催予定。

(3) 当事者の誕生日に色紙を送る活動を続ける。また普段活動に参加できない会員への活動案内の電話連絡を通じ、ふれ合いの機会を大事にしたい。傾聴の心で会員にとって安心できる居場所としていく。

3) おやじの会

(1) 定例会を毎月第4水曜日にルポーズで開催し、情報共有・近況報告・その他連絡等を行う。

(2) やどかりの里と浜砂会が行う行事や活動に協力・参加する。

(3) 精神保健・福祉・医療の課題をさいたま市に要望し、その実現に向けて行動する。

(4) 当事者の誕生日に色紙を贈る。

(5) 会員親睦のため暑気払い・忘年会を行う。

6. クラブ活動

1) やどかり F.C.

フットサルやウォーキングサッカーなど、気軽に体を動かせる機会を継続的に設け、楽しく体を動かしたり、一緒に取り組む仲間と交流できる取り組みを進めていく。埼玉ソーシャルフットボール協会が企画する大会等への参加や運営協力も引き続き行う。

2) やどかりの里音楽隊「Stars&Dreamers」

障害者権利条約30条を意識し、音楽を通じた文化活動として取り組む。定期的な練習を行い、アートフルゆめまつりやココロのあおぞら音楽祭などの発表の機会を通して、達成感を共有する。メンバー、職員、家族という立場を越えて、音楽を楽しみながら、交流を深める機会とする。

7. 特別委員会

1) バザー実行委員会

10月に開催する地域のイベントとして定着しているバザーだが、祝日の変更もあり、今年度は芝川小学校を会場に12月6日（日）に開催する予定。学校関係者、地域住民と連携しながらやどかりの里50周年にふさわしい地域バザーとする。

2) 危機管理対策委員会

法人全体に予測される危機的状況への対策を精査し、協議する。感染症対策に関するマニュアルの見直しを行い、風水害への対策、職員参集訓練、各事業所の防災訓練、事故とヒヤリハットの継続分析を進める。

3) コンサート委員会

バザー実行委員会と協力し、芝川小学校で開催予定の50周年記念大バザーのイベント企画をコンサート委員会で担う。サポートス

テーションやどかりから場所を移すことで、より多くの地域住民と音楽等を通じた交流が図れるよう企画していく。

4) 権利擁護委員会

日々の業務で大切にしたい言葉を集めた「日めくりカレンダー」を完成させ、各所に周知する。虐待防止や権利擁護を意識した研修会の実施、セルフチェックシートの活用など、研修を日常の実践に落とし込めるような取り組みを提案していく。

5) 50周年記念事業実行委員会

実行委員長は山崎勇理事。11月21日（土）に記念式典及び祝賀会を開催する。記念出版についてはやどかり出版が担う。また記念品、調査研究、コンサートなど担当するチームを編成し、検討を進めていく。

6) つなぐ・つくるプロジェクト

(1) ソーシャルファーム検討プロジェクト
 ファイザープログラム「心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援」の助成を受けて、見沼の文化を生かし、さまざまな困難を抱えつつも生きられる場づくりについて、他領域の人たちとともに構想をまとめていく。また、次年度の継続助成についても申請を計画する。

(2) 地域連携・訪問活動プロジェクト
 支援の届きにくい人に必要な支援を届けていくために、サポートステーションやどかりの訪問事業を開始する。今後の訪問型支援の充実に向けて準備室を設けて、地域の関係機関との連携も図りつつ、事業の具体化に向けて始動する。

2020年度やどかりの里組織図

